神田外語大学多言語コミュニケーションセンター（MULC）活動報告（2017-2020 年度）
―多言語教育・文化活動の取り組み（総括と今後の展望）―

吉野　朋子[1]
吉田　京子[2]

１．はじめに

神田外語大学多言語コミュニケーションセンター（Multilingual Communication Center：MULC：マルク）は、12 言語の自律学習支援施設である[3]。MULC では、多言語・多文化に触れる機会を提供する目的で数多くのイベントを開催している。各言語の語学専任教員が企画するイベント[4]に加え、MULC 全体の教育目的を鑑みたセンター長側が企画するイベントもある[5]。本稿では、執筆者がそれぞれセンター長と副センター長を務めた 2017 年度から 2020 年度の期間に企画・開催に携わった講演会と映画鑑賞会について報告する。また、イベント後に参加者に実施したアンケート結果も参考にしつつ、その教育的意義と成果を総括し、今後の課題と展望を述べる。

---

[1] 神田外語大学外国語学部イベロアメリカ言語学科ブラジル・ポルトガル語専攻、2017-2020 年度 MULC センター長。
[2] 神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部、2017-2020 年度 MULC 副センター長、2021 年度 MULC センター長。
[3] MULC の概要や設立の経緯、趣旨については、藤田（2011）、藤田（2019）が詳しい。
[4] 神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所が発行している紀要『グローバル・コミュニケーション』第 8 号（2019）では、MULC の特集が組まれ、語学専任教員が企画したイベントや地域言語エリアの活動に関する報告がある。
[5] イベント開催の折には、学内・学外の多くの方にご協力いただいた。深く謝意を表したい。

２．ＭＵＬＣ講演会

2017 年度から 2020 年度には、以下の講演会を開催した[6]。

第 15 回　2017 年 5 月：「ポピュラーカルチャーとしての 1960 年代の日本フォークソング運動」、ジェームス・ドーシー（ダートマス大学）

第 16 回　2017 年 11 月：「宗教にとっての正しさと不寛容―IS の台頭が問いかけること―」、菊地達也（東京大学）

第 17 回　2018 年 6 月：「音楽から見る叙情の系譜　ガリシアからポルトガルへ―カンティーガとファド―」、黒沢直俊（東京外国語大学）、藤沢エリカ、津森久美子、上田美佐子

第 18 回　2019 年 6 月：「外国語辞典の裏側」、星野守（小学館元辞書編集部部長）、舟田京子、吉野朋子、柳沼孝一郎

第 19 回　2019 年 9 月：「声で奏でる物語―韓国『パンソリ』の世界―」、安聖民、李昌燮、司会・進行：林史樹

第 20 回　2019 年 11 月：「外国語学習と辞典の活用」、中井真吾（元小学館辞書編集部編集長）[7]

第 21 回　2020 年 12 月：「第一言語としての日本手話―基本的特性と獲得―」、浅田裕子（昭和女子大学）

藤田（2011）、藤田（2016）は、2008 年度から 2015 年度までの MULC の活動を報告し、当時センター長の藤田が企画・開催に携わった講演会と映画鑑賞会について詳述している。2017 年度から 2019 年度の企画は、基本的には藤田が報告している方

---

[6] 講演タイトルと講演者を記載、敬称略。当時の本学教員以外には当時の所属を記載した。司会・進行はセンター長・副センター長が主に担当したが、本学教員が担当したイベントもあり、その場合は記載した。

[7] 科研費基盤研究（C）「ポルトガル語の能力評価システムと理想的な言語教育シラバスの確立に向けた基礎研究」（研究代表者：市之瀬敦）主催で開催した。

法を踏襲する形で開催したが、2020 年度は、新型コロナ感染拡大の影響により、対面ではなく Zoom によるオンラインで講演会を開催した。

講演会の主なテーマは言語、文化、コミュニケーションに関するもので、本学の学生が授業で触れる機会の少ないテーマを取り上げている。これらのうち特に注力したのは、第一に、ことばがわからなくても楽しめるような、音楽に関するイベントである。実際にアンケートを見ても、音楽イベントの開催を希望するコメントは少なくない。第17回と第19回の講演会は、プロの歌手・奏者による演奏を通して文化や歴史を学べるイベントとなった。

第 17 回講演会はポルトガル音楽を扱ったものである。カンティーガは、中世ガリシア・ポルトガル語で書かれた歌や曲付きで朗誦された詩で、ファドはポルトガルの民衆歌謡である。本学のブラジル・ポルトガル語専攻や選択外国語のポルトガル語クラスでは、ブラジル・ポルトガル語を中心に学び、2 年生以上はブラジル以外のポルトガル語圏やポルトガルのポルトガル語を学ぶ授業を履修できるが、1 年生は授業でポルトガル文化やポルトガルのポルトガル語に触れる機会が限られている。こうした背景もあり、加えて、スペインのガリシア地方に興味を抱くスペイン語学習者の関心も喚起できることも期待して開催を企画した。講演会では、最初に講師からポルトガル語史やポルトガル音楽、ポルトガルのポルトガル語の発音に関する解説があり、その後生演奏を聴き、参加者も一緒に歌を歌った。

第 19 回の講演会では、韓国の伝統芸能であるパンソリを取り上げた。講演会を開催した 2019 年は、慰安婦問題や徴用工問題を背景に日韓関係が「戦後最悪」「過去最悪」と語られる時期でもあった。このような時期だからこそ韓国への理解を深める機会が必要と考え、韓国の音楽イベントを開催した。パンソリの実演の際には、会場の参加者も拍手や掛け声で参加し、ともに音楽を作り上げていく楽しさを体感できるイベントとなった。講演会では日韓関係に関する話もあり、アンケートを見ると、「仲が良かった時のほうが長い」という講演者のことばが印象強く残ったこと

がうかがえる。

どちらの講演会のアンケートからも、プロの演奏による素晴らしい音楽を聴き、かつ、ただ聴くだけではなく実際に音楽に参加することに対して満足度が高く、文化やことばへの関心が高まったことが推察される。また、英米語学科の学生のアンケートには「英米語学科が気軽に参加できるような講演会があるとよい」というコメントもあり、音楽イベントのようなことばがわからなくても参加しやすいイベントを工夫する必要があろう。

第二に、今期間で高い成果を感じられたのが辞典に関する講演会である。第 18 回と第 20 回の講演会では、外国語辞典に関するテーマを取り上げた。スマートフォンでの自動翻訳が手軽にできる昨今、外国語学習の意義や外国語辞典を使って学習する意味が問われている。また、大多数の学生は初学言語の英語を学習する際に辞典を使った勉強を始めるが、辞典の特長や使い方について学ぶ機会が少ないことから漫然と辞典を使う学生も少なくない。こうした現状から、外国語学習や辞典への理解を深める目的で、辞典をテーマに講演会を開催した。加えて、本学は辞典編纂に携わった教員も多く、身近な教員から辞典の話を具体的に聞くことで、学生の辞典への関心を喚起する目的もあった。

2018 年には日本初の本格的なインドネシア語の辞典が出版され[8]、本学の舟田京子氏が編纂に携わったこともあり、第 18 回講演会では舟田氏に登壇いただきインドネシア語の辞典に関する話を伺った。舟田氏とともにインドネシア語辞典の編纂に携わった星野守氏も登壇し、「単語の意味が分かってもそれだけでは使えない、辞典には語と語の自然な連結を表すコロケーション情報が必要」という話が具体例とともに示された。アンケートを見ると、コロケーションに言及するコメントが多く、コロケーションを意識して外国語を学習する重要性が伝わったことがうかがえる。

また、ポルトガル語辞典の編集委員を担当した吉野がポルトガル語の辞典につい

[8] 舟田京子・高殿良博・左藤正範（編）（2018）『プログレッシブ インドネシア語辞典』小学館。

て、ならびに、スペイン語辞典の執筆を担当した柳沼孝一郎氏がメキシコの日墨協働会社によって 20 世紀初めに編纂された「西日辞典」について講演を行った。講演会にはインドネシア語専攻とポルトガル語専攻の学生も参加したが、アンケートを見ると、ポルトガル語専攻の学生がインドネシア語やメキシコに、インドネシア語専攻の学生がポルトガル語に関心をもったことがうかがえるコメントもあり、多言語学習や多文化理解につながるきっかけとなったことが期待される。

参加者のアンケートには、「辞典は単語の意味だけではなく、どのような活用形があるか、地域でどのような違いがあるか、微妙な違いをどのように説明するのかなど、多くの工夫がされていることに関心を持った」「辞典の値段は高いと思っていたが、辞典を編纂する人の労力を考えると非常に安価だと納得させられた」「辞典を作ってくれた人に感謝して使いたい」というコメントもあり、辞典作成者の側からの話を聞くことによって新たな視点で辞典を使うきっかけも与えられたと推察される。

第 20 回講演会では、英和辞典や仏和辞典の改訂にも携わった中井真吾氏から、辞典を引く必要性と重要性が具体例とともに解説された。「機械翻訳がどんなに進んでも外国語運用能力は重要。通訳や翻訳機を介さずに直接コミュニケーションを図りたいという気持ちは今後もなくならない」という話もあり、「このことばに感激を受けた」というアンケートのコメントもあり、今の時代における外国語学習の目的や意義についても考えさせる機会ともなった。また、「西洋語の土台はラテン語と古代ギリシア語である」という話もあり、学生のアンケートを見ると、ラテン語に関心を持ったことがうかがえるコメントもあった。

スマートフォンでの自動翻訳が手軽にできる現在、なぜ外国語学習に辞典が必要か、その意味を改めて学生に発信することが必要である。その一方でネットを使った新しい外国語学習ツールも出現しており、新しい外国語学習法についても講演会等で紹介できることが望ましい。同時に、コロナ渦で訪日外国人観光客も激減し海

外留学も難しい現状の中で、大学で多言語を学ぶ目的や意義についてもあらためて考えさせる機会も必要であろう。

2020 年度は、新型コロナ感染拡大の影響により対面でのイベント開催が難しくなったため、MULC ではオンラインを活用して多言語・多文化に触れる機会を創出した。Google Classroom に MULC 文化イベント専用のクラスを開設、語学専任講師が動画や資料を作成してアップし、学生や教職員にクラスコードを伝えてアクセスできるようにした。MULC 文化イベントのクラスには、MULC 講演会の関連図書リストやハンドアウトもアップし、講演後には講演で使用した動画やホームページのリストもアップした。

2020 年度の講演会では日本手話をテーマとして取り上げた。本学では 2019 年度に単年度の集中講座科目として「トライ・手話」を開講したが、定員の 2 倍を超える学生が履修を希望したため人数制限を行った。人数制限により履修できなかった学生に手話を学ぶ機会を提供する必要性を考慮して、翌年に MULC で手話に関する講演会を開催することにした。「トライ・手話」は、千葉聴覚障害者センターから派遣された講師と手話通訳による講義で、障害者理解の促進を図る場ともなった。また、講演会は、理論言語学の研究者から、言語学的側面から見た「言語」として手話の特徴や獲得について学べる場となった。

講演会ではカメラオンでの参加を推奨し、参加者も手や顔を動かして手話を体験した。アンケートの中には、「参加者みんなが実際に手話を体験しながら聞けたのも、一体感もあってとてもよかった」という教職員からのコメントもあった。対面授業が少なく自宅でのオンライン授業が続く時期であったが、学生もこうした思いを体感できていることを願いたい[9]。

[9] 手話に関しては、学生の関心も非常に高く、授業科目として定期的に開講できることが本来ならば望ましい。

３．ＭＵＬＣ映画鑑賞会

藤田（2016）が述べているように、映画は多言語・多文化の世界を知るのに最適なメディアである。MULC 映画鑑賞会では上映の前後に、専門知識をもつ教員が作品の時代や社会等について解説し、フロアの参加者との質疑も行っている。2017 年-2019 年度には年度 4 回ペースで以下の映画鑑賞会を開催した[10]。

第 27 回　2017 年 5 月：「セバスチャン・サルガド―地球へのラブレター―」（2014 年／フランス、ブラジル、イタリア）、
　解説：高木耕・舛方周一郎、「白黒写真から見える人間の絶望と希望」
第 28 回　2017 年 6 月：「マダム・イン・ニューヨーク」（2014 年／インド）、
　解説：小中原麻友、「国際共通語としての英語―英語変種を越えて―」
第 29 回　2017 年 10 月：「ビューティフル・デイズ」（2004 年／インドネシア）、
　解説：舟田京子、「純愛ラブストーリーから見えるインドネシアの若者恋愛事情」
第 30 回　2017 年 12 月：「最強のふたり」（2011 年／フランス）、
　解説：河越真帆、「全身麻痺の富豪と移民の介護士の交流」
第 31 回　2018 年 5 月：「クワイ河に虹をかけた男」（2016 年／日本）、
　解説：永井浩、重冨スパポン、「『戦争を知らない』若者が戦争の物語から何を学ぶか」
第 32 回　2018 年 7 月：「エリザのために」（2016 年／ルーマニア・フランス・ベルギー）、
　解説：ロマン・パシュカ、「家族の愛と絆―光と闇の間―」、司会・進行：黒田龍之助
第 33 回　2018 年 10 月：「ベトナムの風に吹かれて」（2015 年／日本、ベトナム）、
　解説：岩井美佐紀、「日本とベトナムの家族を考える」

[10] 解説者名の後に解説タイトルを記載。敬称略。当時の本学教員以外には当時の所属を記載した。司会・進行はセンター長・副センター長が主に担当したが、本学教員が担当したイベントもあり、その場合は記載した。

第 34 回　2018 年 11 月：「折り鶴の声」（2017 年／日本）、
解説：シルビア・リディア・ゴンサレス、通訳：松井健吾
第 35 回　2018 年 12 月：「沈黙―サイレンス―」（2016 年／アメリカ）、
解説：柳沼孝一郎、「信じるとは何かを問いかける」
第 36 回　2019 年 4 月：「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ・アディオス」（2017 年／イギリス）、解説：柳沼孝一郎、「響きわたるキューバの魂！―¡Viva, música cubana! ―」
第 37 回　2019 年 7 月：「女を修理する男」（2015 年／ベルギー）、
解説：華井和代（東京大学）、「紛争鉱物と性暴力のつながり」
第 38 回　2019 年 12 月：「ドゥン　ドット」（焼いてはいけない）（2009 年／ベトナム）、
解説：坂川直也（京都大学）、「ベトナム映画における戦争の映し方について」、司会・進行：鷲澤拓也

今期上映した映画は、多文化理解を目的とするもの以外に、戦争、紛争、弾圧といった歴史の負の部分に関して正しい知識を供与し理解を深めることを意図し選定した映画も多い。第 34 回映画鑑賞会では、本学のシルビア・リディア・ゴンサレス氏が脚本・監督、本学が制作したドキュメンタリー映画を上映し、ゴンサレス氏自身が解説を担当した。映画は、広島と長崎の原爆投下の悲劇をラテンアメリカ諸国の作家やアーティストの声を通して語るドキュメンタリーで、本学の教員や学生も出演している。アンケートを見ると、広島と長崎に原爆が投下された理由や原爆投下に関する世界における捉え方に関して新たな学びがあったこと、ならびに、戦争や平和について再考する機会となったことがうかがえる。アンケートの中には「戦争や平和に関する作品は多いので、おすすめのものを上映してほしい」というコメントもあった。

第37回映画観賞会では、UNHCR難民映画祭に学校パートナーズ[11]として参加し、内戦以降のコンゴ民主共和国における女性に対する暴力の実態を世界に訴え2018年ノーベル平和賞を受賞したデニ・ムクウェゲ氏（産婦人科医）のドキュメンタリー映画『女を修理する男』を上映した。解説には、日本におけるムクウェゲ氏の活動支援団体「コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC）」の副代表で、ムクウェゲ氏と交流のある東京大学の華井和代氏を招き、コンゴ紛争の歴史や実状を報告いただいた。実際に世界で起きている紛争問題を扱う企画は、本学のグローバル・コミュニケーション研究所（GCI）などが主催する企画やイベントと重複することも多く、MULC 企画の独自性の再考やGCIとの差別化が必要となってくる。しかし、グローバルな課題の解決と国際平和の実現という世界規模の取り組み（SDGsなど）や本学の理念を鑑みれば、これらが重要なテーマであることに変わりない。多言語・多文化という MULC ならではの切り口からこれらの問題を取り上げる機会を今後も考えていくとともに、他研究所との合同企画や共催などの可能性も視野に入れていくべきであろう。

2020年度は新型コロナ感染拡大の影響もありMULC映画鑑賞会は開催していない。学内の他部署と協力しながら開催できる方法を検討する必要があるが、授業時間内に開催する解説付きの映画鑑賞という長い時間を要する形式は、近年の動画メディア媒体の多様化や大学の授業カリキュラム、履修条件、時限制約などとの調整が困難になりつつあり、根本的に検討しなおす時期が来ている。

４．今後の課題と展望

國枝（2017）は、多言語教育の観点から大学の果たすべき役割を論じ、学生に文

[11] UNHCR 難民映画祭は、「難民問題の教育・啓発活動に欠かせない教育機関、学校での映画上映を通じ、世界の紛争や、迫害により家を追われた人々の問題についての理解を深めること」を目的とする国連 UNHCR 協会主催の企画で、本学はその趣旨に協賛し、活動に参加する学校パートナーズとして2018年映画祭に参加した。（http://unhcr.refugeefilm.org/2018/school/）

字通り「多く」の言語を学べる環境を整備することを一つの役割として挙げている。本学では選択外国語科目として毎年 12 言語の授業を開講し、加えて、単年度の集中講座として二つの言語の授業を開講しているが、言語や文化の多様性の理解と異文化間能力育成の観点からは、学生がより多くの言語に触れる機会を提供できることが望ましい。授業科目としての定期的な開講が難しい言語に関しては、講演会等の形で学ぶ場を提供することも必要であろう。

2020 年度以降は、学内限定で MULC 講演会をオンラインで開催しているが、学外からも参加希望する声もある。将来的には学外者も参加できることが望ましい[12]。

また、本学においても、小張（2014）が言及するように、名簿上や教育活動上で便宜的に使用されている「日本人学生」と「留学生」という単純な二項対立では捉えきれない状況が生じている。「日本人学生」には海外での学習経験を持つ帰国子女や本人や保護者が外国にルーツを持つ学生を含む。こうした複数言語環境に育った学生の母語や継承語教育に関して本学でも新たな取り組みを加える時期に来ている。本学では、継承スペイン語話者を対象にした授業を 2020 年度より開講している。また、様々な言語の継承語話者に関する研究も本学の教員によって行われており、ワークショップやシンポジウムを開催して意見交換や議論を行うことができれば望ましい。複数言語環境で育った学生の語学力の育成も、グローバル人材育成につながるものであり、その環境を整備することも大学の役割ともいえよう。

さらに、広瀬他（2019）は、複数言語環境に育った学生も含めた本学の学生の日本語力を調査し、日本語力育成のために授業のほかに書き言葉や学術的な語彙に多く触れる環境づくりが急務であることを指摘している。加えて、MULC を含めた学内の施設も日本語学習のために拡大利用する等の検討が必要と指摘している。複数言語環境に育った学生の母語・継承語教育、ならびに、全学生の日本語力育成のた

[12] 現状では MULC 事務局の業務量が多く内容も多岐にわたるため、少なくともオンライン関係をサポートできるスタッフの増員が急務である。

めに MULC をどのように活用できるか、学内・学外の関係者と連携、協力しながら今後の活動内容を工夫する必要もある。

参考文献

國枝孝弘（2017）「大学で多言語を学ぶ意義」、平高史也・木村護郎クリストフ（編著）『多言語主義社会に向けて』くろしお出版、30-42 頁。

小張順弘（2014）「『外国にルーツを持つ』日本人大学生のアイデンティティ形成過程―ことばとアイデンティティの関係から―」『国際関係紀要』、23(1/2)、155-180 頁。

広瀬和佳子・西菜穂子・広崎純子（2019）「多様な言語環境で成長した大学生の日本語力―語彙テストと作文調査の結果から―」『グローバル・コミュニケーション研究』(8)、109-135 頁。

藤田知子（2011）「<教育活動事例> 多言語コミュニケーションセンター・事始め：2008-2010 年度」『国際社会研究』2、217-231 頁。

藤田知子（2016）「多言語コミュニケーションセンター：2011-2015 年度の活動と展望」『神田外語大学紀要』(28)、397-413 頁。

藤田知子（2019）「多言語コミュニケーションセンターと選択外国語教育―私の思い出―」『グローバル・コミュニケーション研究』(8)、5-15 頁。